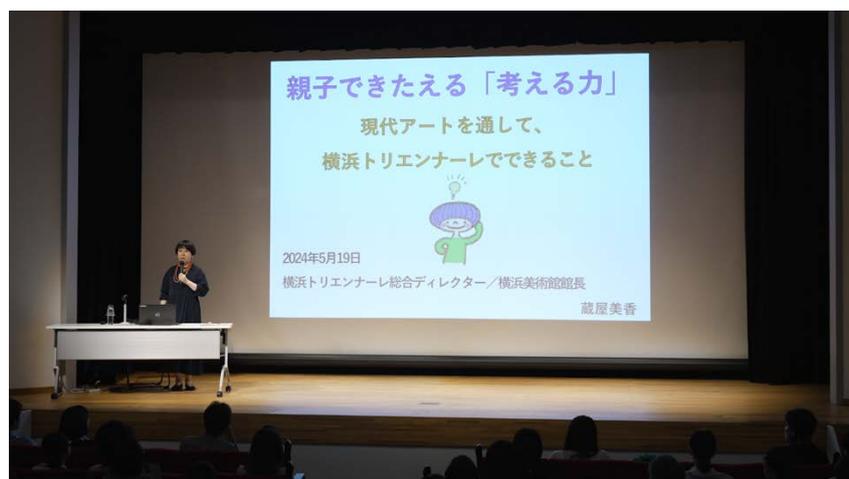


## 第8回横浜トリエンナーレ／蔵屋美香が語る親子できたえる『考える力』： 現代アートを通して、横浜トリエンナーレでできること

開催日時：2024年5月19日

Date: May 19, 2024



蔵屋美香（横浜トリエンナーレ組織委員会総合ディレクター／横浜美術館館長）：こんなにたくさんの方がいらっしやると思っていなかったの、びっくりでございますが、本日はお忙しい中、お出かけいただきましてありがとうございます。また、たくさんのお子さんのお顔が見えるのは、とてもうれしいことです。私がティーンエイジャーの頃には、お父さん、お母さんと日曜日にお出かけするなんて、という感じでしたが、仲良しそうなお父さん、お母さんと子どもさんのお顔がたくさん見えて、本当にハッピーな気分です。

本日は、「親子できたえる『考える力』：現代アートを通して、横浜トリエンナーレでできること」という題名で、1時間15分ほどお話しをさせていただきたいと思います。その後、うまくお時間を取りまして、なるべく質疑にもお答えしたいと思っています。本日、小学校の結構小さいお子さんから、たぶん高校生のお兄さん、お姉さんまで、そして大人の方までいらっしやるので、この幅広い年齢層に伝わるようにお話しするというのはなかなか難しいなと思いますけれども、ちょっと頑張ってみようと思います。

では、改めまして私は、横浜トリエンナーレの総合ディレクターで、この横浜美術館の館長でもあります蔵屋美香と申します。

最初に、ちょっとだけ自己紹介をさせてください。私は、千葉県千葉市の生まれ育ちで

す。母親は美術好きの美術館好きで、父親は歴史オタクの博物館好きで、一番最初、1月の末に生まれたのですが、そのゴールデンウィークには早くも東京国立博物館の前で撮った写真が残っています。なので、3カ月ぐらいで博物館にデビューをしました。その後、数え切れないぐらい両親に美術館や博物館に連れて行ってもらったこと、それからたくさんの本を与えてもらったこと、これらが、私の基礎になってここまでやってきたなというか、なるべくしてこうなったなというふうに思っています。

子どもの頃から絵を描くことが好きでした。夢は漫画家になることでした。今、このイラストも私は自分で描いているんですけども、そんなこんなで、そのままあんまり何も考えずに女子美術大学というところの油絵科に進学して、油絵をまず大学で勉強しました。しかし、漫画家になる夢というのは捨てておりませんで、油絵よりも、どちらかという、漫画のほうを熱心に描いているような学生でした。

その後、某おもちゃ会社にパッケージデザイナーとして就職したんですけども、このままの人生でいいのだろうか少し考えまして、大学院に行こうと考えました。しかし、何をやりたいということがはっきりあったわけでもなく、貯金で通えるという理由だけで、実家の近くにありますが、千葉大学という国立大学の大学院の教育学部に進学し、そこで美術の勉強を続けることになりました。

この時の美術というのは、自分で描くことではなくて、他人が描いた作品について研究をしたり、文章をまとめたり、評論を書いたりするという勉強でした。やってみると、私よりはるかに才能のある人がたくさんいる。自分で絵を描くことよりも、文章で人の作品について語ることのほうがはるかに自分には向いている、ということが分かりました。これが、おそらくたくさん美術館、博物館を見ながら、たくさん本を読んできたことの効果だったのだと思います。

そこから大学院を修了して、東京国立近代美術館という、皇居のお堀端にある国立の美術館に学芸員として就職をし、長く長くお勤めしていたのですが、いろいろご縁があって、2020年のコロナの真っ最中に横浜美術館の館長としてやってきました。東京国立近代美術館にいる時には、もちろん作品を研究したり、展覧会を企画したりもしてきたんですけども、とりわけボランティアさんの育成ということに携わったのがとっても良い思い出です。

そこではたくさんボランティアさんと一緒にお客さんをお迎えして、どういうふうに作品についてトークをするかという理論、やり方をイチから作っていくというような作業もしました。こうしたことから、美術作品を研究したり、展示したりするだけでなく

て、「それを多くの方にどうやってお伝えしようかな？」お伝えした結果、「見た方がどんなふう楽しんでくださるかな？」ということ強く考えるようになりました。今日のお話はそうした私の経歴にとっても深く関わっています。

今、「横浜トリエンナーレ」という現代アートのお祭りをやっています。「やっているの、来てくださいよ」と言うと、大体反応が2パターンあります。一人の方は、「いや、アート、全然分からないんで」と、スーっと尻込みする方ですね。もう一方は、「いや、アートは好きで、印象派とかは好きなんだけど、現代アートはちょっと難しいから、無理だと思います」という方です。このセリフをすごくよく聞くんですね、美術館にお勤めしていると。

じゃあ、印象派は好きだけど現代アートは分からないってどういう意味なのだろう、ということから今日のお話を考えてみたいと思います。今日は、現代アートを通して、「考える力」を鍛えようねというお話ですが、これは現代アートじゃない作品の見方をちょっと今日はお土産としておまけに持ち帰っていただければと思います。



エドゥアール・マネ《フォリー・ベルジェールのバー》1882

ここにある作品は、印象派というか、正確には印象派ではないのですが、印象派関連の画家、エドゥアール・マネという人の《フォリー・ベルジェールのバー》という、1882年ですから、今から140年ぐらい前の作品です。とても有名な作品なので、どこかで見たことあると思われる方もいらっしゃるかもしれません。

アート作品を見る時の基本は、とにかくよく観察をすることです。皆さんの目の前にあるこの大きな、結構大きな作品ですよ。これで実物大ぐらいかもしれないですね。もうちょっと小さかったかな。一体何が描かれているのか、一つひとつ言葉で言い表してみてください。どうですか。前の方から聞いてちゃいますよ。お父さんは、この絵の中で何が描かれているか、ちょっと1つ挙げていただけますか。

参加者：鏡ですかね。

蔵屋：おっと、最初からそれ言っちゃうんですね。じゃあ、お父さん、ちょっとタイム。休み。じゃあ、お隣の別のお父さんにもお聞きしてみましようか。まず、この絵の中には何が描かれていますかね。一番目につくのは何ですか。

参加者：女の人。

蔵屋：女の人ですよ。女の人は何をしているところだと思いますか。周りに何かありますかね。

参加者：お酒を出している。

蔵屋：そうですね、ここにちびっ子の皆さん、20歳以下の皆さんには関係ないですが、お父さんたち、お母さんたちが大好きなお酒の瓶が並んでいます。

よく見ると、ここにテーブルがありますね。この女の方はテーブルにこうやって手をつけているので、お酒を出すカウンターの後ろにいて、お酒を出してくれる店員さんなのかなということが分かってきます。この店員さん、真っ正面を向いて、目はこちらを見えていますよね。この人は一体誰を見ているのでしょうか。はい、あっ、手が上がりました。どうぞ。

参加者：お客さん。

蔵屋：お客さん、そうですね。もしお店の人がこうやって手をつけて、こっちをじーっと見ていたら、見ているのは目の前にいるお客さんですよ。お母さんがびっくりしていますね。「うちの娘、こんなこと言うんだ？」と思ったんでしょうね。そうです、お客さんを見ているのです。

この絵を見るとき、私たちはこうしてこの絵の前に立っているわけですから、実は絵を

見るとき、私たちはこの店員さんに向かい合って立つお客さんの気持ちになって、お客さんのポジションから絵を見ているということが分かります。今、真ん中の店員さんがいるね、お酒を出しているね、カウンターの後ろにいるね、というお話をしましたが、この絵の中に他に人はいますかね。じゃあ、僕、どうぞ。どこかにいますか、真ん中の女の人以外に人が見つかりますか。

参加者：お酒を買っている人。

蔵屋：どこにいますか。そうだね、絵の右の端っこのところにお酒を買っているんじゃないかなと思われる、帽子を被って、おひげを生やした男の人がいますね。そうです。その人の前には誰がいますか。

参加者：店員さん？

蔵屋：そうだね、そうです。ここにも店員さんがいて、後ろ向きで向こうにお客さんがいて、お酒を買っているみたいに見えますね。ということは、ここはどのような空間なのかな。普通、お父さんとお母さんはよくご存知ですが、お酒を売る店で、カウンターがあって、店員さんがいたら、後ろはすぐ壁になっていて、たくさんお酒が並んでいることが多い。つまりお店のカウンターの中はとても狭いことが多いのですが、このお店はもしかして後ろにもテーブルが見えるし、テーブルがコの字になっていて、この店員さんの後ろにも別の店員さんがいて、別のお客さんにお酒を売っている。そういう珍しい作りのかなと、ちょっと疑問が湧いてきますね。

じゃあ、他に、この絵には、今、真ん中の女の人、後ろの女の人、その女の人からお酒を買っているお客さんの3人が見つかりましたが、この絵の中に他に人ってどこかにいますかね。どうかな。じゃあ、どうぞ。

参加者：左上に足が見える！

蔵屋：あれ？そうですね、この部分ですね。ちょっと見えないかもしれないけど、今の男の人が言ってくれたのは、絵の左上のところに、実はこの2本の足みたいのが描いてあるんですね。これは、実はとっても有名なこの絵を見ている多くの人が見ていない部分なんですね。絵の端っこのこんな小っちゃなところに誰が気が付くでしょう。真ん中にドーンと人がいるのに。でも、今の人はずいぶん先に気が付いてしまったんですね。

他に、ここを拡大部分にしましたが、人が見つかりますか。じゃあ、お隣の弟さんか

な、聞いてみようかな。他に人いる？

参加者：下

蔵屋：下？足の下のところ？ 何人ぐらいいる？ 何十人？ そうですね。ちょっと意地悪な言い方しちゃったけど、数え切れないぐらい……実はよく見ると、すごいいっぱい人が描いてあるのが分かりますか。この後ろのバルコニーにこうやって肘をついている女の人が2人、その連れの帽子を被った人が1人、その奥にもウワッと人がいっぱいいて、後ろには大きなシャンデリアも吊られていますね。

じゃあ、ここは思ったよりでっかいお酒を売るお店なんだなということが分かってきましたね。後ろにいる人、足が見える人、後ろに見えるすごく何十人もの人たち。ここまで観察してきて、これ、どういふシチュエーションのどういふ絵なんだろうって不思議に思ったら、もうインターネットでサクサクっと調べてしましましょう。Wikipedia いうとっても便利な辞書みたいなものがインターネットにはあるので、お父さん、お母さんに聞いて、探してもらってみてください。

そうすると、こういうふう書いてあります。“ミュージックホール「フォーリー・ベルジェール」にある、お酒を売るバーが描かれている。中央に描かれたバーメイドの後ろに鏡があり、そこに映るミュージックホールの様子が描かれている。” バーメイドいうのは、お酒を売る店員の女の人という意味ですね。

「鏡？そんなものあったっけ？」と思って戻ってみると、どこに鏡があるか分かりますか。じゃあ、その後ろのシマシマの T シャツを着たメガネの女の人に聞いてみましょうか。どこが鏡なんですかね。そうですね。今言ってくれたのは、この真ん中に描かれている女の人の後ろに人がいっぱいいるように描いてあるけど、そこ全体がもう全部でっかい鏡なんじゃないかというお話でした。

そうなんですね。最初にフライングしたお父さんが言ってしまいましたけれども、このお店はこういうふうにお酒を出すカウンターがあります。女の人がこういうふう立っています。まっすぐ前を見ているので、お客さんが前に立っています。その後ろは実は大きな空間ではなくて、狭いんだけど、一面が鏡になっているので、女の人の反対側、私から見ると、ちょうど皆さんが座っているような人がワーっといっぱいいる、すごく広いミュージックホールという、お酒を飲んだり、音楽を聴いたりする、楽しいお店が写っているんです。

じゃあ、こっちにいる二人の人は一体何だったのでしょうか。別の店員さんと別のお客さんだったのでしょうか。それとも、この人の後ろ姿が鏡に映っていて、この女性の前に立ってお酒を買っている人があの男の人なのかもしれませんが、それでもおかしいことがあります。

なぜかという、女の人が真ん中にいて、真後ろに鏡があるとしたら、女の人はどこに映りますか。真後ろですよ。真後ろに女の人が映っていますか。映っていないですよ。この女の方は幽霊でしょうか。でも、黒いドレスを着て、金髪をこうやって結んでいるところを見ると、どうもこれがやっぱりこの女の方が鏡の中に映った像みたいですね。ということは、本当は真後ろに映るこの女の方の後ろ姿と女の方の前のお客さんを、このマネという人はわざわざこっち側にずらして描いた。ちょっと嘘をついているのです。

じゃあ、どうしてそうしたと思いますか。真後ろに鏡に映った後ろ姿を描いたら、どうなりますか。そうだね。今、誰か言ってくれたけど、見えないよね。絵の中のこの人の真後ろに隠れるように鏡に映った姿を描いても、それは見えないし、前の方が主人公なのに後ろにちょっと変なずれた像があったら、邪魔だね。見づらくて、この女の方が目立たないから、ちょっとこっち側に避けちゃえと思ってこうなったのかもしれないね。

こんなふうに、「印象派好きです、きれいだから」って、たぶん皆さんは思うかもしれませんが、意外に印象派の絵というのは、このようにトリックがいっぱい、謎がいっぱい仕組まれていて、そう簡単に、きれいだね、では済まされないものがたくさんあるんですね。「本当に私たちは印象派が単に好きなのかな？」って、ちょっと自信が揺らいできませんか？

今、私たちがやったことは何だったのかをまとめます。まず、すごくよく観察しました。みんなに、「何が描いてありますか」「誰がいますか」「お客さん、どこにいますか」って聞きましたね。それは絵をすごくよく見て、1個1個見つけることでした。

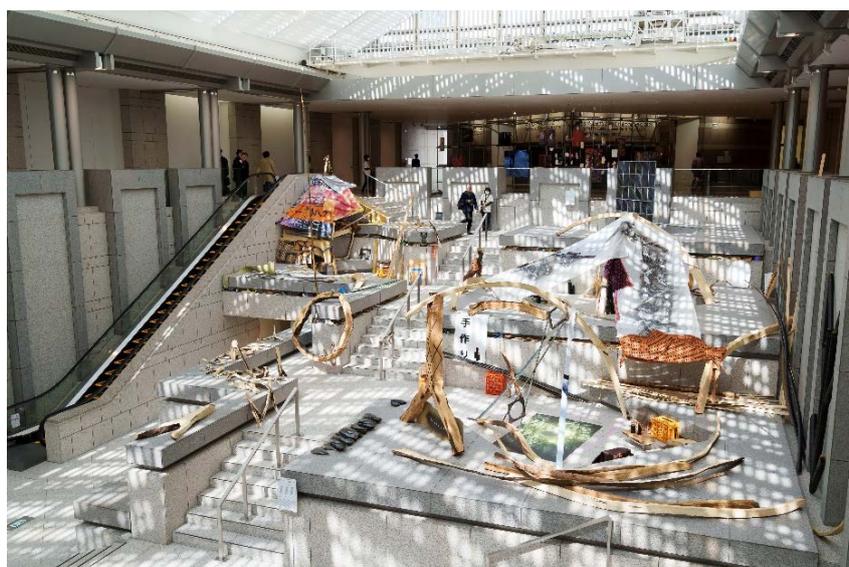
あっ、そうだ、言い忘れていたけど、この足ね。足は何かという、当時の資料を読むと、この「フォーリー・ベルジェール」というでっかいミュージックホールではお酒を飲みながらサーカスも見ることができたそうで、こういうふうにブランコのパフォーマーの足がちらっと見えているということなんだそうです。こうした普通の人を見逃しちゃうようなところも画家がわざわざ描いたということは何か描きたい理由があったはずだから、隅から隅まで見ていくと、いろいろ気が付かなかったことに気が付くことができます。これが観察です。

そうすると、「これはどういう意味なのかな?」「このお酒を買っている人はどこに立っているのかな?」「もしかして、後ろが鏡ってどういうこと?」というふうに考えます。そして、この絵に何が描かれているのかを推理します。そこでいろいろ考えて、そろそろ限界だと思ったら、もう本とかインターネットで調べちゃいましょう。そうすると、140年前のミュージックホールというところではサーカスもやっていたんですよとか、見るだけで分からないような情報が入ってきて、いよいよ、ここがどういうお店だったのか、どういう状況なのかということが分かってきます。

そうすると、「そうか、サーカスをやっていたんだ。それで、ここに足ね、こんな高いところに」ということが改めて分かるので、もう一回絵をよく観察することになります。以下、ずーっと繰り返しです。観察する、考える、調べて、「あっ、そうだったんだ!」と分かる。それを確かめるため、もう一回作品を見る。これをグルグル、グルグル繰り返していくと、絵が、さっき見たみたいに、今まで気が付かなかったたくさんのお話を教えてくれるようになります。

この間、何が起きていたかというのと、もちろん一人で観察して、考えて、調べてもいいんだけど、これを一人でも、あるいは隣にいるお父さん、お母さんや兄弟とでも、お話をしながら考えているんですよ。自分の中で、「これ、何かな?」「いや、こうなんじゃない?」「いや、そうじゃなくってさ」と、一人の中でもお話をしているし、もし兄弟やお父さん、お母さんが隣にいたら、「あのサーカスの変な足、何だと思う?」とか、「こっちにいるお酒を買っている人、どこに立っていると思う?」とか、疑問を投げたり、自分の考えを伝えたり、「いや、僕はそう思わないよ」って、お兄ちゃんの見聞を聞いたら、「あっ、そうだったのか、そういう考え方もあるね」というふうにお話をすることで、どんどん面白さや理解が深まっていくわけなんです。これが、今、現代アートに入る前ですけどね、基本的な美術作品の見方なんです。

じゃあ、印象派は好きだけど、現代アートは分からない問題に戻ります。今、ここに映っているのは、横浜トリエンナーレに入って、大きな空間の階段に並んでいる作品の様子です。これらが、いわゆる現代アートというもので、さっきの絵とはだいぶ様子が違います。これを見て、「うーん、なんかよく分からないし、難しいから、私には無理です」という人がたくさんいるのだけど、私が言いたいのは、そうじゃないですよということです。

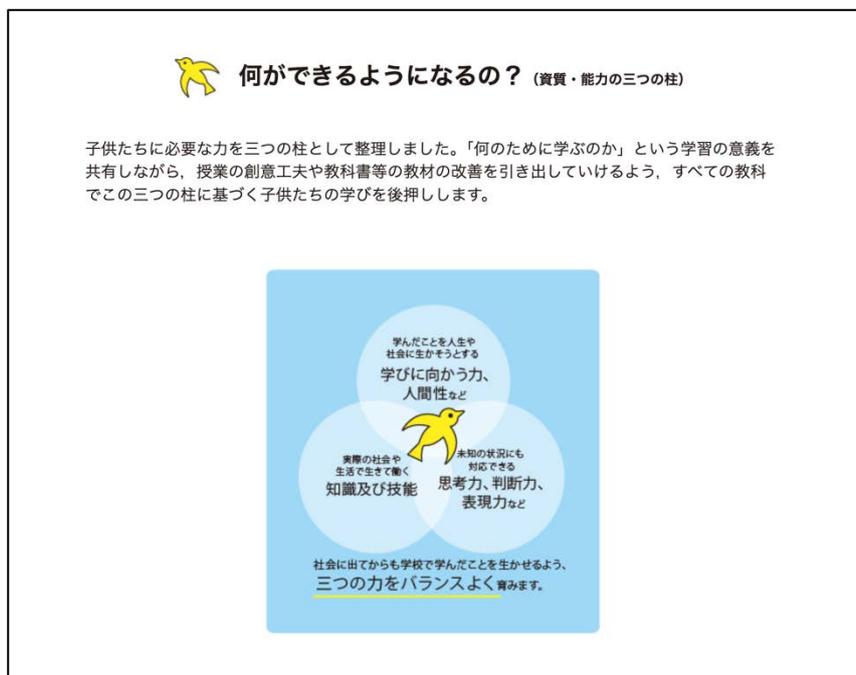


第8回横浜トリエンナーレ展示風景（撮影：富田了平）

観察する、考える、調べて、そうだったのかと分かる。もう一回観察する。こういうグルグルの流れは、実は現代アートもアート作品なので、見方は一緒です。でも、違いもあります。1つ大きな違いは、例えばここに映っている作品、ほとんどガラクタの掘っ立て小屋みたいな作品ですけど、よく見慣れた絵とか彫刻ではない、こういう不思議な形の作品がいっぱいあります。あるいは、ビデオの映像の作品なんかもあって、まず、それが分かりづらい感じを呼んでいるかもしれません。

もう1つは、印象派の絵はさっきみたいに見ればいろいろなことが出てくるけど、基本、見た目、「わー、きれいだな」と思うことができる色や、具体的な女の人とか花とかの形を持っています。ところが、現代アートには一目見るだけでは分からないものがいっぱいあって、「きれいだな」という入り口がなかなか掴めません。そこで、考えるとか知識を調べるとかいうところの手順がだいぶ印象派より多くなってきます。

もう1つ、今もちょっと言いましたが、色や形がきれいなものもあるけれど、きれいじゃないものもたくさんあるのです。じゃあ、次はこう思いますよね。「きれいじゃないし、考えなきゃいけないし、調べなきゃいけないし、こんな面倒くさいものをどうして見なきゃいけないの？」って思いますよね。



文部科学省ホームページ「学習指導要領」より

ここからは、お父さんとお母さんのためのお話です。「学習指導要領」というものがあるって、大体 10 年おきに文部科学省が、日本はこんな子どもを育てたいから、こういう学校教育をしますよ、という方針を作ります。今のは 2016 年に改正して、2017 年から使われている方針です。タイトルは「生きる力 学びの、その先へ」となっています。文部科学省が、今、日本の子どもにはこういうふうに勉強してほしいなと思っているそのイメージは何かというと、この三つの柱の図です。

まず、何を理解しているか、何ができるかという「知識・技能」。これは何を知っているかですね。例えば、日本地図を見て、ここは鹿児島県だねとか、ここは静岡県だねと知っているとか、数字を知っているとか、あるいは科学記号を知っているとか、そういう知っているものですね。暗記にあたるものです。そういう知識を学ぶことはもちろんですよ。

もう 1 つの右側は、知っているだけじゃなくて、それを使って物事を考えたり、物事を判断したり、それを人に伝えるために自分の言葉で表現したりする力が必要ですと言っているんですね。（「思考力・判断力・表現力など」）この知っていることと、知っていることを使って人に伝えたりすること、人に伝えたり、自分で解決策を考えたりする力の一番てっぺんにあるのが、「学びに向かう力、人間性など」と書かれているのですが、これは自分でいろんなことに興味を持って、自分で調べたいなと思って、自分で考

えて、自分でこんなふうにしたらもっと面白いぞとアイデアを出して、人に伝えたりする力のことですね。こういう力を持って、将来良い世界を子どものみんなで作っていいというの、今、文部科学省が謳っている子どもの学力感なんです。これは小中学生用で、高校生はもうちょっとバージョンアップします。

**どのように学ぶの? (主体的・対話的で深い学び)**

主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業を改善します。

- 一つ一つの知識がつながり、「わかった!」「おもしろい!」と思える授業に
- 周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業に
- 見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業に
- 自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業に

> [主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について詳しくはこちら \(PDF:2.03MB\)](#)

文部科学省ホームページ「学習指導要領」より

そのために具体的に学校ではどうしなさいと言っているかということ、この「主体的」「対話的」「深い学び」という、三本柱を実現してくださいねと言っています。では、「主体的な学び」とは何かということ、自分でいろんなことに興味を持ち、「これ、調べたいよ」とか、「お父さん、次の週、ここに見に行きたいんだけど」という好奇心ですね。それと、「自分は将来どうなりたいかな?」というイメージを関係付けながら、自分の学習を自分で進めていく子どもということです。

では、「対話的な学び」とは何かということ、そういうふうにお勉強をするときに一人で黙々とやるんじゃなくて、例えばお友達に聞いたり、先生に聞いたり、あるいは地域のおじいちゃん、おばあちゃんに聞いたりして、みんなの話を聞きながら自分の考えをたくさん育てていってねということです。

もう1つ、「深い学び」の視点というのは、結構重要なんですけれども、そうして「得た知識を相互に関連付けて、より深く理解し」とあるのがすごく良いところで、1個1

個知ったことは、「あっ、これとこれはつながっているな」とか、「これとこれは結びついて同じことを言っていたんだ。別のところで聞いた話なのに」とか、つながりに気が付く力が重要だというふうに言っているんですね。

高校受験を控えたお父さん、お母さん方はご存じだと思いますけど、神奈川県には「特色検査」というのがあって、私もちょっと問題を見てみたんですけど、これがまさにこの作りになっていました。すごい難しいんですよ。英語でガソリンカーと電気自動車について良いところ、悪いところを議論して、それから何パーセントの省エネになったかなというのを英語の中から読み取って、数学の知識を持って議論をし、その後、日本の中では地域ごとにガソリンの値段が違うんだけど、どうしてかなということを考えさせ、その結果、日本の白地図、県の名前が入っていない地図を見せて、この中でどの県が一番割高なガソリンを買っているか考えなさい、と書いてあったんですね。

こんなの無理、無理って思いましたね。私ではとても無理です。私の時代は、この前のところに書かれてある、何を知っているかなというところがとても重視されていたので、暗記したりして、それを選択問題で A、B、C の中から選んで書いていました。鎌倉幕府ができたのは何年というふうに、覚えてさえいけば入試は通ることができましたが、今はその知っている知識を使って自分で物事を考えて、より良い社会を作るぞというふうに思っていないと、なかなか問題が解けないことになっています。とても難しいけど、でも、勉強としては正しいというか、やりがいがある方法だなと思います。

どうしてこういう学習目標のバージョンアップが起きたのかというと、その背景にあるのは、AI（人工知能）の時代がこれからやってくる中で、子どもさんはどういう人間に育ったら AI に負けないお仕事ができるかなということ、やはり文部科学省をはじめ、大学の先生たちが一生懸命考えた結果が、あのような改定につながっていると思われるわけです。

2010 年に新井紀子さんという人が『コンピュータが仕事を奪う』という本を書いて、世界で最初に AI が登場したら、今お勤めしている人の半分が仕事を AI に取られちゃいますよ、という衝撃の予測を立てました。この 2 年後に、オックスフォード大学が、この 10 年、20 年の間になくなる職業トップ 25 というのを発表して、さらに話題を呼びました。

ただ、AI は人間のやることが何でもできて、取っていつちゃうかということ、そうではなくて、コンピュータというのは基本計算機なので、全部数式とか数学の理屈で表せることしかできないんですね。今、ChatGPT とかで何々を教えてと言うと、まるで人間が

考えているみたいにいるいろいろ教えてくれるけど、これは数学の論理、あるいは、これまでのデータによるとこう答えるのが喜ばれる確率が高い、とかいった統計……数学の論理、確率、統計という3つの理屈を使って、さも考えているかのように機械が答えているだけなんです。だから、たまに変な答えがありますよね。

そうすると、こうした数学で記述できないことで、この新井さんによると、例えば、冷蔵庫を開けて、牛乳を飲みたいな。奥にあるから、ちょっと手前のものをどかして、あっ、ヨーグルトあったじゃん。じゃあ、ヨーグルトにしよう……みたいな、人間だったら5歳の子どもでもできるようなことが、数式では表せないためにコンピュータにはできないのだそうです。

では、そのように数式で表せない、自分で考えて、自分で意味を作り出す仕事をする事ができれば、人間はAIに仕事を奪われない。だから、その力を育てる教育を学校でしようよというのが今の文部科学省の方針になっているし、それが特色検査のような、神奈川県の入試にも反映されているということなんです。

お父さん、お母さんの話は終わりで、子どもさんの皆さんはちょっと眠くなっちゃいましたか。じゃあ、もう一回アートの話に戻しましょう。こういう話を聞いてくると、自分で観察し、自分で考え、自分でこう思うよと人に伝え、お父さん、お母さんや兄弟が、「そうじゃないよ、僕はこう思う」と言われたら、「そっか、そうだったかもね。でも、僕はこっちのほうが好きだな」というふうに、対話をしながら考え、表現する力をつけることのできる、先ほどのようなアートの見方はすごくぴったりだと思うんですね。

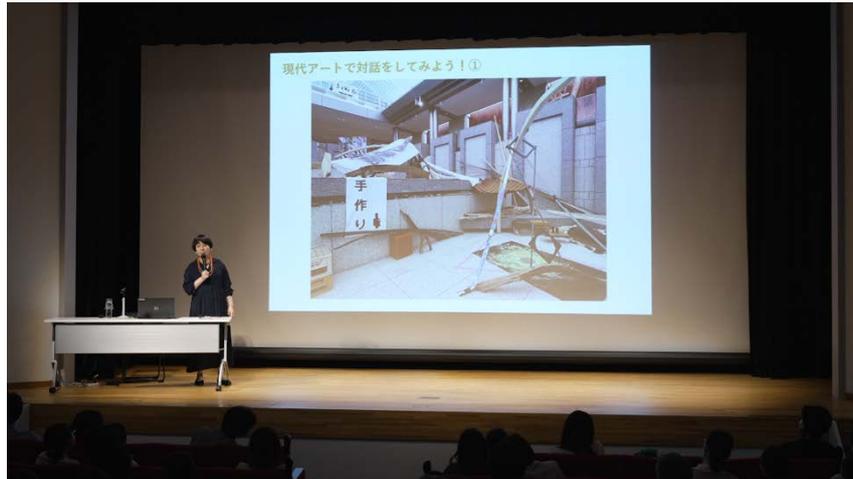
もちろん幼稚園生とか、やっとな3歳で絵が描けますみたいな子には難しいのだけど、たぶん小学校5年生から大学受験をするぐらいまでのティーンエイジャーの人たちには一番親しみやすく、さっき言ったような物の考え方を身につけることができる良い教科書なのではないかと思っています。



第8回横浜トリエンナーレ展示風景（撮影：富田了平）

では、実際に作品を見ながらアートでお話しをしてみましょう。まず、皆さん、ここに来る時に大きなグランドギャラリーという、階段が両方にワーッと広がっているスペースをご覧になりましたよね。そこにさっきもお見せしたけど、ちょっと木切れがいっぱい落ちていて、作っている途中の、お家を建てる途中の現場みたいな、変な作品があります。「これも作品なの？だから現代アートって嫌なんだよ」って思われちゃいそうな作品なのですが、この作品をさっき言ったように観察しながら、考えてお話しをしてみましょう。

まず、階段の下に立ちますと、この階段、3つの踊り場があることが分かります。ここに実際立っていただけるわけですが、ここが1つ目の踊り場。踊り場というのは、階段と階段の間の途中にある広場みたいなところですが、ここが1個目。そして、奥に見える、白いこんな屋根みたいなのが見えるところが2つ目の踊り場。そして、赤やオレンジの屋根が見えているところが3つ目の踊り場です。



この段階でも、この階段には3つの踊り場というスペースがあり、そこに1個ずつ何か立っているから、上りながらその3つを見ていけばいいんだなということが分かります。これが1個目の踊り場のところを上ってみた様子です。何が見えますかね。さっきと同じように教えてください。じゃあ、さっき前のほうの人にたくさん答えてもらったから、ちょっと真ん中辺の人に聞いてみようか。

真ん中辺の人で、どうですか。この1番目の踊り場にあるもの、何か目につくものがありますか。

参加者：虫取り網みたいな…

蔵屋：虫取り網みたいな？ どこかな？ 右。そうか、ポインターというものがあつたね。この辺？これかな。虫取り網みたいな、謎の物体があるね。よく見ると、ここから棒がつながって下まで下がっていて、この地面の変な丸がある黒い紙の上に置かれているみたいですね。

これ、さっきみたいに女の人とかお酒の瓶とかじゃないから、なかなか人によって見え方が違うので、さっきよりちょっとお伝えするのが難しくなっているのが分かりますか。じゃあ、他に何か目につくものはありますか。じゃあ、その後ろのほうに座っている人は。

参加者：左のほうに箱みたいなものがある。

蔵屋：これかな。そうですね。これ、何の箱でしょうね。そうだね、「アサヒ」って書いてあるからアサヒビールのビールケースだね。ビールを12本入れて、こうやって、よ

いしょって運ぶ、酒屋さんとかスーパーとかによく置いてあるビール瓶のケースだね。そうすると、他の箱もたぶんそうだなというのが分かりますね。

もう1つぐらい何か気が付きますか。じゃあ、隣の人はどうですか。

参加者：箱の上に載っている黒い枝みたいのがある。

蔵屋：これかな？　そうですね。何で枝が載っているんだろうねという感じですよ。一体この枝は何なのか。じゃあ、お隣のお母様ですか。お母様にも聞いてみましょうか。何かすごく目立つもの、誰も言わないのがすごい気になっているんだけど。

参加者：手作り

蔵屋：そうですね。ここに何か「手作り」と書いてある、何かのお店の前によくパタパタとしているようなものの切れ端を取ってきたようなものが、「手作り」って書いてありますね。確かに手作り中な感じですよ。何かができかかっているのかもしれないけど、まだ完成していなくて、バラバラでゴミみたいな、そんな感じの空間であることがちよつとずつ分かってきます。

今、木があり、ビールケースがあり、手作りがあり、虫の網みたいな物体がありました。この写真をよく見ていただくと、ここの際間に、もともと建物はデザイン的に間が空いているんですけど、何かがいっぱい詰まっています。これをよく観察すると、こんな感じに木の切れ端とか、竹の切れ端とか、あと写真みたいなものがいくつも置かれていることが分かります。写真は何かの小屋みたいなものが広い草原の真ん中に立っていて、ちょっとボロっつい感じのものです。

今が1段目ですが、今度2段目のお家に上がってみると、こういう景色が見えます。むっちゃ木くずがいっぱい落っこちているから、ますます作っている途中なんだよねという感じがしてきます。ここに大きな布がかかっている、何かの写真が写っています。これは現地でよく現物を見ていただけたらと思うのですが、50年も100年も前ぐらいのモノクロの白黒の写真で、長いスカートをはいた、なんとなくヨーロッパ人みたいな感じの人たちが、木で作った小屋みたいなところでお魚みたいなものを干したりしている様子が写っています。後ろは海で、雪の積もった冰山か山みたいなものが見えるから、ここはすごい寒い国なのかなということが分かってきます。

ここが3段目の入り口のところで、今まで柱とか木のクズとかしか落っこちていなかった

たけど、ちょっとテントっぽいものが出来上がりかけている様子が見えて、その中に木を使って映像が流れるモニターが置かれていることが分かってきます。振り返ると、1段目がこれ、2段目が大工さんの作りかけ、3段目はテントが立っているというふうに、下からちょっとずつボロっちいけど家みたいなものが出来上がっていつているのかな、ここでたくさんの大工さんがお仕事したのかな、だから木がいっぱい落ちていたり、立っていたり、木のくずが落ちていたりするのかということも分かってきます。

(一番上のテントの中にある) この映像作品には何が流れているのかなと見ていますと、ぱっぱっぱっと、たくさん映像が流れて、英語の文字が出てきます。鮮やかな民族衣装を着た家族がテントの前に立っている様子が映っていて、「Resourcefulness」という英語の文字が書かれています。小学生の皆さんにはちょっと難しい言葉ですが、今はスマホですぐに調べることができます。

「Resourcefulness」を調べると、機知に富むこと、高い処理能力を持つこと、と書かれています。機知に富むというのは、ちょっと困ったことがあるけど、こうやって、こうやって、こうすればできちゃうよという力のことですね。高い処理能力も同じですね。ちょっと何かがないんだけど、これとこれを組み合わせれば、ほら、コップができちゃったみたいな、キャンプでする工夫みたいなことを Resourcefulness と言ったりしますね。

もう1つ、「Resilience」という言葉が、やはり小屋の前に映されています。Resilienceは、これは高校生以上、大人の方には覚えておいてほしい言葉で、今いろんなところでよく話題になっている言葉ですね。これは、困難から自分で立ち直る力のこと、回復力、復元力と言ったりします。何か困った事があって、辛いな、ポキッと折れたままになっちゃわないで、竹みたいにビヨンと自分の力で跳ね返して、立ち上がれる力のことです。学校でいろいろ大変なことがあったりしても、この Resilience……「大丈夫、自分で何とかなっちゃう、びよん！」という力があれば。あるいは会社で辛いことがあっても、自分で立ち直る力があれば、人間にはこの力が人が思っているよりたくさんありますよ、というのが今の大きな話題になっている言葉です。

ここまで来たところで、さあ、この作品、どういう意味なのかなって知りたくなってきました。そうすると、現代アートの展覧会には大体解説文というのが付いています。この作品にも付いています。ちょっと読んでみますね。“北欧の遊牧民サーミ族の血を引くヨアル・ナンゴさんの作品は、このサーミ族の歴史と文化を踏まえて生み出されています。この土地にある材料や技術を組み合わせて、仮設のものを作ります。ここ大きな階段には遊牧民の住まいをモチーフに、人々が休憩するための空間が登場します。材

料には、神奈川県内でこのヨアルさんが自分で採ってきた木や竹が使われています。”

遊牧民ですからあっちこっち移動しますが、移動をしながら、その場その場で必要なものを使ってお家を建てて、終わったら壊して、また次の場所に移動するという暮らしをするサーミ族の人たちは、テレビとかゲーム機とか、物をたくさん持っている移動の邪魔だから、あんまり物を持たない暮らしをしてきました。

ここで、このサーミ族の生き方は、例えば物をいっぱい持っている人が偉いよとか、たくさん買って、どんどん捨てちゃえばいいよとやっている、そんな暮らしをしているうちに、地球環境をめっちゃめっちゃにしてしまった私たちの次のもっと良い生き方のヒントになるんじゃないですか、ということが書かれています。

じゃあ、サーミ族って何？と思ったら、Wikipediaをもう引いちゃいます。“サーミ族は、スカンジナビア半島北部ラップランドおよびロシア北部のコラ半島に住む先住民族です。伝統的に沿岸漁業、毛皮の捕獲、羊の放牧など、さまざまなお仕事をしてきました。最もよく知られているのはトナカイを放牧するお仕事です”と書いてあります。

なるほどね、ちょっと分かったような気がするけど、でも、分からない言葉もいっぱいあるなと思ったら、さらに調べちゃいます。スカンジナビア半島ってどこ？ みんな知っています？ 私はたぶん無理ですね、方向音痴なので。ラップランドってどこ？ 国の名前？ 聞いたことないよね。コラ半島？ どこですか？ 房総半島みたいな感じですが。あるいは、サーミ族って誰？ どこに住んでいる、どんな人たちなの？ いつ頃から暮らしているの？ その人たちはどんな歴史をたどったの？

例えば、ヨアル・ナンゴさん、この札によると、出身地はノルウェーのアルタで、今住んでお仕事しているのもノルウェーのロムサ(トロムソ)というところだと書いてある。じゃあ、ノルウェー人じゃないの？ 何でサーミ人なの？ いろんな疑問が湧いてきますね。

さらに、さらに、これらを調べていくと、北ヨーロッパに今のヨーロッパ人の人たちが入ってきて、ノルウェーという国ができる前にサーミ族という人たちが住んでいて、まだ国がなかったので、国境を越えてトナカイを追ってお家を作ったり壊したりしながら、身軽にたくさん移動していたということが分かってきます。そんな暮らしがあるんだ。新しいことを知ることができます。あるいは、その場所、その場所で見つけた材料で物を作るって面白そう。どうやったらこうした人が住んでも壊れないようなお家が建つかないかな。どうしてサーミ族の人はそういう技術を持っているのかな。いろんなことを考え

ることができます。

こんなふうに、1つの現代アート作品を使うと、例えば「スカンジナビアってどこ？」という地理の問題や、「サーミ族ってどんな人たち？」という民族の問題や、あるいは「たくさん買って、たくさん捨てちゃうという暮らしが地球環境を壊しているかもしれない」というSDGsの問題や、「たくさん買ったり、たくさん捨てたりしないで暮らすにはどうしたらいいんだろう？」という問題が、ズルズル、ズルズルとたくさん出てくるんですね。

こんなふうに1つのアート作品の中には、国語も、地理も、世界史も、それから民族学や言語学といった専門的な学問も、あるいは産業の成長率や人口の増減といった統計学のような数学の問題も、さまざまな問題がギュッと詰め込まれているので、現代アートの作品をよく観察し、調べ、お話をし、また考えというふうにやっていくと、教科に縛られない、いろんな知識や考え方を身につけることができるのです。その力は私自身がとても実感しているところです。



第8回横浜トリエンナーレ展示風景（撮影：富田了平）

さらに、もう1つ、ヨアル・ナンゴさんの作品を見て、反対側を見ると、反対側にも階段がワーっと続いていて、遠くにもう1つテントみたいなものが見えます。あれ、これもヨアルさんの作品なのかしら？ こちらの側には、巨大なビルボードみたいな、巨大なモニターがあって、そこでは大人の人たちがブルルーとかヒューっとか変な口真似をして、「私の口真似をして、この音を覚えてください」と言っているビデオ作品が流れています。

この不思議なテントとこの不思議な映像作品、一体何を言おうとしているのだろう。考えてみますね。とこ、とこ、とこと階段を上っていくと、このもう1つのテントが見えてきます。これは札の解説を読むと、セレン・オーゴードさんというデンマークの作家さんの《プレッパーズ・ラボ》という、3年前の作品だということが分かります。「プレッパーズ」って何？ もうタイトル見ただけでも分からないのでくじけますが、作られた年を見てください。2021年、今から3年前です。

3年前、私たちはどんな暮らしをしていたか、覚えていますか。小学生の人はもしかして学校に全然行けなかったかもしれないよね。あるいは旅行に行くこともできないし、おじいちゃん、おばあちゃん家に行くこともできなかつたって、覚えているかな。そうですね。何があったのかな。コロナですね。コロナウィルスの流行があって、人とお食事したり、おじいちゃん、おばあちゃん家に旅行したりすることが全部駄目になっていた。そんな時期が2021年でした。

その時期に作られたこの作品の中では、もともとコックさんだったアーティストが、食べ物腐らせないで保存するための方法をいろいろ調べています。例えば燻製したり、例えば発酵食品にしてお漬物にしてみたり、というのをいろいろやっています。解説を読むと、何でこんなことをこの人が始めたのかといえば、コロナの時にスーパーから急に食べ物がなくなった。お金で食べ物を買おうと思っても、食べ物がなくなっちゃう時があるのだとびっくりして、じゃあ、お金を使わなくても自分で食べ物をとって、自分で作って、自分で保存できる方法を考えようと思ったんですね。そして、この《プレッパーズ・ラボ》という作品を作ったのだということが書かれています。「プレッパーズ」というのは下ごしらえという意味で、「ラボ」は研究所です。

こんなふうに見てくると、同じテントだな。それからお金を使わないで食べ物を得たり、食べ物を無駄にしないで環境に優しい生き方をする方法を探しているのかなというふうに、ヨアル・ナンゴさんの作品と共通する点があることが分かってきます。そうすると、いくつもの作品がつながって見えてきます。

展覧会というのはひとつひとつの作品にも意味があるのですが、この作品の隣にこれがあるとか、この作品の上にこれがあるとか、位置関係にも実は全部意味があります。なぜなら、隣にある作品は大体同じようなテーマを扱っていて、関連性があるからです。あるいは全然違う作品を隣にわざと置いているとしたら、それは正反対のものを置くことでどっちが正しいか考えてみてねと、見る人に問いかけているからです。

こんなふうに、一つの作品をよし、こんな意味だな、となんとなく納得したら、隣あるいはその隣、上、下、その同じ部屋にある作品を同じように観察し、考えて、お話ししながら見てみてください。そうすると、似ている点とか正反対の点とか、個々の作品がいろんなふうに関連し合っていることが分かってくると思います。こういうふうに、一つのものを知ったら、「あれともしかしてつながっているんじゃない?」とか「この話、いつか友達から聞いたけど、今日、お父さんが言っていたあの話のことだ」とか、頭の中でバラバラになっていた知識を結びつけて、新しい発想を生み出していくための発想の訓練になるのが、こうした物の考え方なのです。

じゃあ、そろそろ最後に近づいてきましたけど、もう1点、会場内の作品を観察し、お話しをしてみましょう。この作品、何点か写真をお見せしますので、まず何を表しているのかなというか、何がここにあるのかなということをよく見てみてくださいね。作品は4点あります。まず、2点をいろんな角度から撮りましたね。これは手前にいたこの人のアップですね。何でしょうね。人であることは間違いないね。奥の人はこんな感じだね。丸まっちゃっているね。これも手前の人顔のさらにアップですね。手とか、お洋服とか、アクセサリが見えてきますね。



ジョシュ・クライン 《営業終了（マウラ/中小企業経営者）》《生産性の向上（ブランドン/会計士）》2016  
（撮影：加藤健）

もう2点の作品が同じ部屋の反対側にあります。じゃあ、まずこの写真を見て、これの作品は一体何を表しているのか、観察した結果をちょっと教えてもらいましょうか。これは何だと思う？ どうぞ、教えてください。これ何でしょうね。

参加者：仕事帰りというか、仕事に関係するものじゃないかなという気がする。

蔵屋：どうしてそう思ったのかな？ どうして仕事帰りだと思ったの？

参加者：みんなスーツを着ている。

蔵屋：そうだね。よく気が付いたね。この人たちはパジャマとかジャージとかじゃなくて、ちゃんとスーツとか、ちゃんとした靴を履いたりしていますよね。ということは、こういう格好していくのはお仕事かなという感じがしますね。じゃあ、この人たちはお仕事をしている人たちだなということが1つ、今、発見できました。

他にどんな人たちかなと気が付いたことがある人はいますか。じゃあ、後ろの手を挙げてくれた女の人はどうですか。

参加者：ゴミというか、ビニール袋に入ってますよね。

蔵屋：そうですね。なぜかそのきちんとお仕事スーツを着た人たちがビニール袋に入っていますよね。どうしてだと思います？

参加者：ビニール袋に自ら入っているというよりは、入れられちゃった感じがする。

蔵屋：どうして自分で入って、「うわー、うれしい」と思っているんじゃないくて、入れられちゃった感がするんだろう？

参加者：しゃがんじゃっている、人っていうより一個の塊みたいな……

蔵屋：今の話は、この人たちはちょっと縮こまっちゃってきて、人というよりはもう一個の塊になっちゃって、ビニール袋に入れられちゃっている感じがしちゃうという話でしたね。何で仕事スーツを着たきちんとした人たちが一個の塊みたいに丸まって、誰かにビニール袋に入れられちゃったんでしょうね。そこの手を挙げてくれている男の人はどうですか。

参加者：なんか寒そうだった。

蔵屋：どうして寒そうと思った？

参加者：目をつむって何かにこらえてるみたい。

蔵屋：こらえている？ なるほどね。そうだね、さっきアップでお見せしたけど、目をつぶっているし、すごい我慢しているっぽい顔をして、堪えているみたいな顔だよ。寒そうだよね、確かに、うーってなっちゃっているみたいだね。

お仕事スーツを着ています。お仕事の帰りかもしれません。でも、縮こまっちゃって、一個の塊みたいで、人にビニール袋に入れられて、寒いよって何かを我慢したり、堪えたりしているみたいなふうに見えますね。他に気が付いたことがある人いますか。じゃあ、後ろの人から行こうかな。どうですか。

参加者：ゴミ袋に入れられて、ポイって捨てられちゃったんじゃないの？

蔵屋：そうだね。これ、ちなみに床に置いてあるよね。床にビニール袋に入れて何かをボンと置くとしたら、それは大体ゴミだよ。ゴミ袋を朝こうやって出す時のゴミに見えちゃうよね。

じゃあ、今の人の意見だと、ゴミ袋に入れられているみたい。お仕事スーツを着た人が縮こまって、一個の塊みたいになって、寒いよって何かを我慢しているようで、ゴミ袋みたいなものに入れられて、道にポイっと捨てられている。もう1つ気が付いたことありますか。その人どうぞ。

参加者：絶対人に入れられている感じがする。

蔵屋：自分で入ったんじゃない感じがする？

参加者：自分で入ったとしたらどうやってフタ閉めるの？

蔵屋：ピンポン。すごーい！そうだよ。

自分で入った、寒そうだとか、堪えているなというのものもあるけど、そもそもこれを縛ることは中に入っている人はできないから、誰かが入れて外から縛ったんだよねという観察だよ。すごい！私も気が付かなかった！ だいたい見えてきましたね。じゃあ、この人たちはお仕事スーツを着ているのに、寒いよって縮こまって、塊みたいになって、何かを我慢しながら、誰かにビニール袋に入れられて、ゴミみたいにポイって捨てられちゃったというのがみんなの観察だね。

じゃあ……そうだ、そうだ、もう一人さっき手を挙げてくれていた人、どうですか。

参加者：息苦しそう……

蔵屋：そう、そう、想像してみたら、ほら、よく幼稚園の時とか、ビニール袋を被って遊んではいけませんと言われたと思うけど、あれは息ができなくなっちゃうからなので、この人たちはビニール袋に入ってこうなっているということは、息をしなくても、もしかしてもういいのかな？ あれ、ゾー、言いながらちょっと気持ち悪くなった、自分でも。

じゃあ、どうしてこのお仕事スーツの人たちはゴミ袋みたいになって、もう息をしなくてもいいよみたいにゴミ袋に入れられて、捨てられちゃったんだと思う？ 何か考えつく人いますか？ はい、その人、どうぞ。

参加者：仕事をクビになった？上司に捨てられた？

蔵屋：えっ、上司に捨てられた？ 僕、どこの会社の方？ お父さん、お母さん、ちょっと冷や汗だったね、今の発言。子どもさんはズバツと言いますね。そうね、もしかしてクビになっちゃって、上司にもう要らないよってゴミ箱に入れて、お前なんか捨てちゃうよって言われて、すいませーんって捨てられちゃったのかもしれないね。

盛り上がってきましたね。どうぞ。

参加者：さっきの人の続きみたいな感じだけど、クビにされて、それで仕事から帰ってきたら、先に人とかがいて入れられた。

蔵屋：先に？ えー、怖い、怖い。嫌だ、そんな会社。今のお話は、会社でもうクビと言われて、「えー!？」と思ってお家に帰ってきたら、その人が先に家に来ていて、それで捕まって、ビニール袋に入れられちゃったんだって。

じゃあ、その人はどうですか。

参加者：いじめられた。

蔵屋：いじめられちゃったのかもしれないよね。そうだよ。仕事で失敗したとは限らなくて、もしかしてちゃんと働いていたのに、いじめられちゃって捨てられちゃったの

かもしれないよね。手、挙げてた？ その人、どうぞ。

参加者：仕事クビになって帰ってきた時に愛人とかに見つかった。

蔵屋：愛人？ 何言い出すの？ 愛人とかに見つかった？ そうだね。さっきの人のに似てるけど、さっきの人は会社のクビと言った人が家に先に来ていて捨てられちゃったんだけど、今のは、会社でクビと言われて帰ってきたら、今度は愛人の人がいて、その人に捕まってゴミ袋に入れられちゃったという話だね。すごいね、みんなの想像力。愛人という言葉は聞くとね。

でも、大体皆さんの観察、まとまってきましたね。何かお仕事しているんだけど、何かトラブルがあってクビになったり、愛人の人に捕まったりして、もう息をしなくていいぞ、すみませーんと縮こまって、ゴミ袋に誰かに入れられて捨てられちゃったんだね。

じゃあ、この人たちを捨てたのは誰なのか。じゃあ、これはお父さんやお母さんに聞いてみますね。お父さんたち、お母さんたち、このお仕事をしているスーツを着た人たちを捨てたのは誰なのでしょう。今、子どもさんは上司の説と愛人の説がありましたが、他にこの人たちを捨てた人にアイデアがありますか。お父さん、お母さん、どうですか。どうぞ。

参加者：泥棒に捨てられた。

蔵屋：泥棒に捨てられた？ また新しい説が出ましたね。どうしてそう思われましたか。

参加者：家に帰ってきて、そこにたまたま居合わせちゃった泥棒。

蔵屋：強盗みたいなもので泥棒に捕まって、えいって捨てられちゃったということですね。皆さんのお家にはいろんな人が待っているんですね。怖いお家ですね。鍵はしっかり閉めたほうがいいと思いますよ。

そちらのお父さんはどうでしょう。

参加者：社会に捨てられた。

蔵屋：貧しさに負けたっていうやつですね。社会ってどういう社会ですか。

参加者：会社もそうですけど、自分が必要のない人間だって捨てられてしまった。

蔵屋：そうだね。会社もそうですが、いろんな社会のいろんな箇所で、自分なんてもう必要ない人だって思わされてしまって、捨てられることになってしまったんじゃないかということですね。

お母さん方はどうですか。じゃあ、後ろの方、どうでしょう。

参加者：AI に仕事を奪われちゃった方なのでは。

蔵屋：そうですね。AI に仕事を取られちゃった人なんじゃないか。さっき AI が働いている人の半分の仕事を持っていっちゃって、半分の人が失業しちゃうという衝撃の予想がありますよというお話をしましたが、その問題を扱っているんじゃないかというお声でしたね。もう一人手を挙げていらっしゃいましたね。同じ？なるほどね。

どうですか、お仕事していらっしゃるお父さん、お母さんがたくさんいらっしゃると思うのですが、AI に「お前なんかもう要らないよ」と言われている気になったことってありますか。シーン。やめよう。今日は日曜日だから、そんなことは忘れて子どもさんと楽しもう。愛人のほうがよっぽどいいよね。

観察してみて大体意見がまとまってきたので、この解説文を読むと、一応、この作家さんは、やはり技術革新で人工知能 AI や自動化によって仕事が効率化されて、それに伴って、もうお前は要らないよってゴミ袋に入れて捨てられてしまった人たち、というテーマで作品を作っていることが書かれていました。

タイトルがね、すごいんですよ。《長年の勤務に感謝（ジョアン/弁護士）》だって。それから《総仕上げ（トム/管理職）》。手前が《営業終了（マウラ/中小企業経営者）》、奥が、《生産性の向上（ブランドン/会計士）》。

嫌ですね。そう、でも、嫌だなと思う気持ちと同時に、どういうことをこの人たちはもう一回勉強したらまたお仕事できるのかな。この人たちがハッピーになって、ゴミ袋から出ることができるのかなと考えるのは、実は子どもの皆さんの時代の宿題なんですね。そのこともあって、文部科学省も自分で考えて、AI ができない脳みそを鍛えて、素敵な社会を作ってねと、皆さんにとっても期待しているということなんですね。

大変盛り上がりましたね。最後なんですけど、ちょっと横浜トリエンナーレは何をやろう

としているのかということをお話しして終わりたいと思います。横浜トリエンナーレってそもそもなんだという話なんですけど、3年に1回横浜で行われる大きなアートのお祭りです。特徴は、世界中のアーティストが出品するということです。今回も、南アフリカの人とか、トルコの人とか、ノルウェーの人とか、アメリカの人とか、中国や香港や台湾の人とか、30以上の国や地域からアーティストが作品を出していて、今のように、僕の地域ではこういう問題が起こっているんだよとか、私の地域は今みんなこんなことを考えているのよ、ということをお話して皆さんに教えようとしてくれています。

会場は、今いる横浜美術館のほかに4会場ありますから、行ってみてください。今回は、中国のアーティストック・ディレクターという、全体の作品や作家やテーマを決める人たちをお招きしています。リウ・ディンさんと、キャロル・インホワ・ルーさんです。

この人たちも実は高校受験の子どもさんを持っているご夫婦です。だから、この展覧会を3年かけて一緒に準備する間に息子さんの高校受験を乗り越えなきゃいけなくて、途中とっても大変でした。中国の受験というのはすごくて、半年の間に10回ぐらい試験があって、その間ずっと息子さんはもう緊張しまくりなんだそうで、お父さん、お母さんも本当に大変だなというふうに思って脇から見っていました。

今回のテーマなんですけれども、私たちが生きている世界は、普通に暮らしていると普通なんだけど、でも、ちょっとテレビを見ると、例えば「大地震が起きました。石川県の人たち、大変です」とか。「たくさん買って、ポンポン捨てて、100均で壊れたら買えばいいや」とか、「去年来たTシャツ、もう可愛くないから捨てちゃって、また買おう。どうせ1,000円だし」とか、たくさん買ってたくさんポンポン捨てているけど、そういうことが地球環境をとっても悪くしているということは、もう学校で皆さんたくさん習っていますよね。

こういう問題もあるし、皆さんが大人になった時には、もしかして夏今もう38度もあるけど45度ぐらいになっちゃっているかもねとか、そういう問題があるよね。あるいは、お金持ちな人とそうじゃない人の差がどんどん、どんどん大きくなっちゃっていて、一部の人ばかりすごいお金持ちで他の人はみんな苦しいという、ちょっと20年ぐらい前にはなかった世の中がはっきり見えてきましたよね。

あるいは、高校生ぐらいになると、ネット社会の中であの人面白くないからハブにしてやろうとかって、LINEの返事が急に来なくなったりとか、ちょっと意見が違うことを言うと、もうあの人とおしゃべりしないとダメって言われちゃうとか、もっと仲良くできるはずなのにネットがあるおかげでお互いにすごい意地悪になっちゃっていて、なんか生きて

くいなという時がありますよね。

こういう世の中で辛いことばかりに思えてくると暗くなっちゃうけど、でも、そうじゃないよ、ちょっと頑張れば、良い世の中が来るよというふうに思って生きていくにはどうしたらいいだろうというのが今回のテーマなんですね。そのヒントにしたのは中国の小説家、魯迅さんという人で、100年ぐらい前に、今、僕もすごく辛いんだけど、その中で小っちゃな希望を見つけよう、ということの本の中で言っています。

この本をヒントにして、全体の、私たちはどうやって生きていこうかなというテーマが決まりました。その中で3つほど主なテーマをご紹介しますことができます。この3つをヒントにすると、横浜トリエンナーレのいろんな作品はこういうことを言っているのかと大体見当がつくので、お父さん、お母さん、あるいはお兄ちゃん、お姉ちゃんが妹や弟に対して、今、私がずっとやってきたみたいなの、「これ、何に見える？」とか「この人たち、どうしたのかな？」とか、「この人たち、どういう気持ちなんだと思う？」とか「後ろに見えるこれは何なのかな？」とかいう質問を投げかけるヒントにすることができます。

テーマの1つは、「つらいときこそ想像力が爆発！」というテーマです。すごいハッピーな時にもたくさん面白い作品を作れるかもしれないんだけど、今辛いぞと思った時こそ、よーし、何か作ることで頑張ろうというふうに、面白いものができることがあります。さっき Resilience という、ちょっと駄目だなと思ったときでも、自分でビヨンと立ち直る力が今話題ですよというお話をしましたけれども、これはまさに Resilience に関連するテーマですね。

それから「別の生き方を探そう」です。ヨアル・ナンゴさんとサーミ族のところでお話ししましたが、サーミ族の人はお家を買うために働くということはありません。なぜなら、自分でお家を作って、次の場所に行く時には壊しちゃうから。しかも、自然の素材を使っているから、壊してもゴミにならず、ちゃんと自然に還るから。そして、トナカイは自分のいる分だけ取って、食べられない分は獲らないので、自然を壊すこともないから。こうしたサーミ族のような暮らしをヒントにすると、今のもう去年の T シャツ要らないから捨てちゃって、また新しいのを 1,000 円で買おうという行動をちょっと変えることができるかもしれないよねというのが、もう1つのテーマです。

もう1つのテーマが、「わたしたちが世界を変える」。世界をちょっと良いほうに変えようよと言われても、いや、そういうのは才能がある人とか、ヒーローとか、何か特別な人がやることでしょと思うと、私なんか無理、無理と思っちゃうんだけど、そうじゃな

くて、みんな一人ひとりがすごい小さなことをやれば、それが何十個も積み重なれば、いつのまにか世界はもうちょっと生きやすく、楽しい場所になっているよ。この3つがこの展覧会のメッセージになっています。

例えば、「つらいときこそ想像力が爆発！」という作品が、大きな階段の巨大モニターで大人の人たちがみんなビューンとか、プー、ボンとか、変な音を口真似しているこの映像作品です。これはウクライナのオープングループという人たちの作品で、《繰り返してください》というタイトルです。

これがどういう作品なのか。この人たちがどういう辛い状況にあって、その中で何をしようとしているのかは会場の解説に書いてあるので、どうぞ、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、弟さん、妹さんと一緒に見て考えてみてください。ヒントは、ウクライナです。今、ウクライナで何が起きているか、皆さんは知っていますかね。とっても辛いことが起きているよ。

あるいは、「別の生き方を探そう」。これはヨアル・ナンゴさんで、ずっとお話ししてきたように、長い時間働いてお金をもらって、もらったお金でお家を買って、家賃を払って、食べ物を買って、学校に行って、服を買って、でも、働くことがすごい辛いなど思っている人がたくさんいる。あるいは一生懸命働いてきたのに、さっきのAIが入ってきたり、上司の人が意地悪だったり、愛人の人に捕まったり、泥棒の人に捕まったりして、ポイって捨てられちゃうかもしれない。

そんなに辛いんだったら、お金を稼がなくても生きていける方法を考えたらいいいじゃん。サーミ族の人みたいに、その辺で見つけたものでお家を作って、自分で動物を捕まえてお肉を食べればいいじゃんみたいに考えるヒントを与えてくれるのが、このヨアル・ナンゴさんの作品です。ヒントは、「サーミ族の人たちってどんな暮らしをしていたのかなと調べてみよう」、です。

それから、美術館の外側の壁に大きな落書きが広がっています。これはSIDE COREという日本の3人組のアーティストさんの作品で、《big letters, small things》というタイトルです。こうした壁にたくさん落書きをすることを「グラフィティ」と言ったりしますね。本当は街の書いちゃいけない場所、商店街のシャッターとか駅の壁とかに夜中にこっそり描いちゃうのがグラフィティなんだけど、今回はこの壁を全部アーティストさんに自由にやってくださいと渡して、アーティストさんが会期中ずっとここに、特に若い皆さんに伝えたいメッセージを描いてくれています。

彼らアーティストも特別な才能があるヒーローやヒロインじゃないんだけど、こうやって毎日毎日絵を描き換えながら、小さなメッセージを小学生、中学生、高校生の皆さんに伝えることで一緒に世界を変えようよと励ましてくれている作品です。

さて、これらが大体横浜トリエンナーレの大きなテーマと、それぞれの作品の考え方で。これから会場に行かれて、どうぞ皆さんで、「これ、どう思う？」とか「分からないよね」とか「分からないから、すぐ Google 先生に聞いちゃえ」とか、そんな話をたくさんしてくれたらうれしいです。

最初の質問、印象派は好きだけど現代アートは分からないという状態、ちょっとは解消しましたかね？ 印象派とはいえ、全部が私たちは分かって見ているわけではないし、大体 140 年前のフランスの酒場で何が起こっていたかって、実はすごい全然関係ない話だから、私たちが知っていることはすごく少ないですよ。印象派はきれいだけど、ここに何が描かれているかを知るためには 140 年前のフランスを調べないといけないので、それはあまり身近な話では実はありません。

ところが、現代美術の作品は、「去年の T シャツを着ないで捨てちゃうって、本当にそれでいいの？」とか「お友達の話を見ないで、ちょっと意地悪しちゃったけど、それでいいの？」とか「コンピュータが入ってきたら、お父さんがクビになっちゃうかもしれないけど、僕の家、それで大丈夫？」とか、そうしたとっても身近な問題を考えるためのヒントがギュッと詰まっています。

こうした現代アートの見方が少し分かってくると、印象派は好きだけど現代アートは分からないという声もちょっと減るんじゃないかなと思います。現代アートで考える種をたくさん皆さんで見つけてみてください。ここに映っているのは、作品を出してくれたたくさんの国から来てくれたアーティストの皆さんです。ここに民族衣装で写っているのがサーミ族のヨアル・ナンゴさんです。私の話は以上です。ありがとうございます。

もう、早速会場に走りたい気持ちは山々と思うのですが、7、8分、お時間が残りましたので、もしご質問があれば、1つ、2つお受けして終わりにしたいと思います。もしご質問のある方は、手を挙げていただけたらマイクを持って向かいます。子どもさんからの質問でもいいです。何かありますか。後ろの方、どうぞ。

参加者：今日は本当に楽しい時間をありがとうございました

蔵屋：ありがとうございます。隣は娘さんですか、キラキラしていますね。

参加者：すみません、ちょっと放っておいてください。

蔵屋：大丈夫です。仲良しでいいですね。

参加者：すみません、彼女もすごい楽しんだと思います。私、別にアートを自分でやっているわけじゃないんですけれども、好きでよく見に行くんですけれども。子どもの時は、私、やっぱり現代アートが分からなくて、すごく、古い絵は子どもが見ても向こうが説明してくれるところが多いというか、それに対して、ただ丸とか四角だけだったりする現代アートがどうしてもとっつきにくくて、何が良いのか分からないで来たんですけども。大人になってみたら、この古い絵よりも現代アートのほうが自分の考える余地を残してくれているアートのように思って、すごく良いなと思っているんですけれども。でも、今日のお話の中でいろいろ考えて説明をするとか、言葉で考えるというお話もあったんですけれども、見た時の自分の印象を言葉にせずに、本当にそのまま言葉以前の状態で自分の中に残すということも私はすごく大事なことのような気がしていて……よく、今、美術鑑賞教室とか、いろいろ世の中にもあるんですけれども、すごく良いなと思うし、自分でも参加したりするんですけども、言語化しちゃうことで失われるものってないのだろうか、というところもすごく疑問に思っていて。その辺についてちょっとご見解をいただければと思っています。

蔵屋：はい。もちろん言葉にすることで消えてしまうものもあれば、言葉にしたって相手に100%伝わっていないなという、もどかしさがあります。それは、アート作品が基本的には視覚言語、目で見える色や形という別の言葉の体系で書かれているからなんです。これも視覚言語という言語の例えでよく語られるんですけど、ですので、おっしゃっていることはとても正しいです。

ただ、それをやはり大切にされることもアートの醍醐味だと思いますし、ここに、この話をする前に、ちょうど一昨日、数学者と、気候変動を物理的に研究している方とお話ししたんですけれども、やっぱり数字だけの世界の人間では全く見えない世界がアートを見ている人の間にはある。それは、目で考え、それが脳に直結し、そしてもう一つ五感を使っているからではないか、と言われたんですね。

確かに、目だけではなくて、匂いもあれば、音もあれば、お隣の人の雰囲気も感じている。こうした言葉にできない部分も含めて全てのアートの体験だというのは、本当に正しいと思います。ただ、一方で、それを言葉にまとめる訓練というのもとても重要で、その言葉を通じて別の人の意見を聞いたり、自分の考えを改めたりするというのも、も

う1つ現代アートが割と主に担っているとても重要な役割ではないかと思っています。

ですので、今日のお話は言葉にする、対話をするがメインになっていましたけれども、そうではない部分もどうぞ大切にしてくださいというのは、私からも本当にお願ひしたいところです。ありがとうございます。あと、もう一方ぐらいお聞きできますよ。そちらの方。

参加者：今日はとても興味深いお話をありがとうございました

蔵屋：ありがとうございました。

参加者：私はちょっと海外に長く住んでいて、そして向こうでもかなり美術館とかに子どもと一緒に見に行ったりしたのですが、その時にいつも触れていたのは、やはり感想と哲学というのが結構英語圏のほうではすごく重要なキーになっていまして、今日の発表とお話と、それから文部省の中に哲学という言葉が1つも出てこなかったんですけど、いわゆる日本のその鑑賞に関して哲学というのはあまり重要視されてないものなのでしょうか。

蔵屋：それは哲学の定義にもよると思うんですけど、カントみたいなオーソドックスなものから、いわゆる現代思想と呼ばれているものから、今、脳科学みたいなものも哲学に非常に関わりがあるというふうに言われたりしていて、哲学もさまざまになっているというところがあります。決して無関係ではなく、例えば、今、哲学や、それから介護の方面で話題になっている「ケアの思想」というのがあるんですけども、こうしたものは美術を見るときにも大きな参照元になっています。

ですので、美術も哲学自体もとても大きく変化をしていて、その2つはいつでも必ず関係をし合っていて、でも、それだけではなく、数学や物理学も今アートの世界とちょうど大きく関わっている。そういうふうに関わっている学問がいろんなふうに関わっているというのが今のアートの在り方ではないかと、私自身は思っています。ありがとうございます。

どうですか。子どもさんのほうから何か聞かせてください、あと一言。大丈夫かな？じゃあ、終わろうかな。じゃあ、ちょうどお時間になりましたので、今日のお話は終わらせていただきたいと思います。どうも、長時間、私のほうもお話させていただいて、いろんなご意見を伺えて楽しかったです。でも、特に、やっぱり愛人にはびっくりしちゃったかな。でも、とても楽しかったです。本当に今日はありがとうございました。